ちょっと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

らいち２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ちょっと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

【Ｎコード】
Ｎ１１９９ＢＡ

【作者名】
らいち２

【あらすじ】
ええ、タイトル通りですよ。私が欲求を満たすためにいろんな世界に行ってくるのです。何故、そんなことをするのにいろんな世界を移動するのかって？作者がその方がいいと考えているからですよ。まあ、それが本心なのか私にはわかりませんがね

これ一応プロローグなんですよ

「いや～それにしても暇ですね～」

「そう言いながらくつろぐのはどうかと僕は思うよ」

「別に構わないじゃないですか。それに、そんなことを言ったらあなたも同じことが言えますよなじみさん」

「おいおい、そんなことを言っちゃうと僕が誰なのか読者の皆にわかっちゃうだろう。それに僕のことは親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「丁重にお断りします。それと、別にいいじゃないですか、減るもんじゃないですし。と言うか、なじみさんってそんなことを気にするような人でしたっけ？って、この場合人ってことでいいのでしょうか？」

「人でも人外でも好きな方を取ってくれると僕としても嬉しいよ。そうだね、この作者が書いている安心院なじみ（僕）はそんな風になっているようだね。まったく、自分の意志で好きなことを自由に言えないから困ったものだよ」

「そうですか？私はあまり気になりませんが」

「君は別だよ。なんだって君は存在そのものがあまりにも異常なんだから」

「・・・・・・・・・なじみさんがそう言ってもあまり説得力ないですよ？」

「まあ、確かに悪平等（ノットイコール）と自負している僕がそう言ったら信用できないのは無理はないね。でも、これは疑うのが愚かしいと思ってしまうほどの事実なんだぜ。そのことは君がよく知っているはずだよ」

「いや、確かにそうですけどいきなり最初っからそんなことを言ってしまうのもなんだかなぁと思ってしまうんですよね」

「おいおい、そんなことを君は気にしていたのかい？多少の主人公の設定を紹介するのは当たり前のことだろ？」

「いやいやいや、これ多少どころじゃないですって。もろに設定の核心に繋がることを紹介しちゃっているじゃないですか」

「だから？別に困ることでもないだろ。だって、そんなことがばれたとしても君と言う存在が変わるわけじゃないいんだからさ。それ

に、これぐらいのことでいきなり全部を知られたとしてもそれが絶対に正しいとは限れないんだから」

「・・・・・・・・・・・・いや、うん。あの、言っている傍から思いっきり言っちゃっているんですけどもしかしてわざとですか？」

「ナンノコトカナ」

「それは認めたと受け取っていいのでしょうか。いいんですね、ありがとうございます。お礼に、あなたのスキルを１つ奪うことにします。もちろん、キスで」

「準備はいつでもオッケーだよ！さあ、早く僕の胸に飛び込んでおいで！」

「と、思いましたがやめます。と言うか、キスは冗談だったんですけどね。そして、どこに胸に飛び込む要素があったんですか？」

「うう、よくも僕の純粋な乙女心を弄んでそれはないよ君」

「なじみさんが乙女心ってなんか嘘くさく感じる、ってなじみさんて誰でもあるんじゃなかったんですか？」

「そうだけど？」

「それじゃあなじみさんが女の子かどうかなんてわからないじゃないですか」

「ええ～、君それ本気で言っているのかい？どこからどう見ても美しい少女でしょ？」

「どこからどう見ても少女なのかわからない女性ですね、あがとうございます」

「・・・・・・・・・・・・・・・オコルヨ？」

「冗談ですから、そのどこからか出した刀を喉に突きつけるのをやめてください」

「うん、よろしい。なんて、言うと思ったのかい？」

「デスヨネー」

～３０分後～

「何も３０分もやる必要はなかったと思うんですが」

「そうかい？本当は永遠とやるつもりだったんだけどね、この小説の作者が早く物語を進めたいって我儘を言っててさ。しょうがなく、３０分で済ますことになっちゃったんだよ。それに、そう言っている割には平気じゃないか君」

「まあ、こんなことで終わられてしまうほど軟じゃないですしね。それにしても、本当にこの作者は我儘ですね。自分でここまで引き延ばしているのにいきなり早くしろだなんて我儘にもしようがあるってものがあるんじゃないですか」

「別にいいんじゃないかな。だって、そう思ってことは人間だと言う何よりの証だろ。それは大切なもんでもあるしね。まあ、そんなことも僕にとってしまえばどうでもいいことだがな」

「それに関しては同意見ですけどね。正直今は興味もありませんし。時間が経てば興味が湧いてくるかもしれませんけど」

「相変わらずの言い方だね君は。それで、これから君はどうする気だい？ま、どちらにしても作者の思い通りにしか動けないと思うけどね」

「そうですね、ちょっと欲求不満と言いますか、やってみたいことかあるんですよね。なので、それを実現しつつ作者が望んでいる物語を進ませていくとしますよ。ああ、それとなじみさん」

「なんだい？」

「1つ間違っている点がありますよ。確かに私は作者の思い通りにしか動けないかと思います。しかし、

その作者は私の思い通りに動いているとも言えるんですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「言いたいことはそれだけです。それでは次に会う時までお元気で。ああ、それと少しでもいいですから台詞以外のことを書いた方がいいですよ。台詞だけだとほぼ漫画に近いですしね。まあ、それでいいのならそれで構いませんが」

そう言って、まるでそこに初めからいなかったかのように消えた主人公。そして、その場に1人取り残された安心院なじみは笑みを浮かべながらこう言った。

「ふふ、まったく君ってやつは本当に飽きさせてくれないね。そんなのノーマルじゃない奴が聞いても意味が分からないって思われるだろうに。でも、それが君って言う存在なんだけどね。だからこそ君には『フラスコ計画』を手伝ってほしいと思っていたんだけどな。まあ、構わないか。君が何をどう考えどう行動して、どんな結果になるかなんて予測することはできてもそれが君の答えだと予測することはできないしね」

さて、記念すべき一話目ですがどうしましょう

さて、どうしましょうか。

え？タイトルと同じことを言っている？

あなた方がどう思うが勝手ですが、そう言うことは私ではなくこの小説に作者に言ってください。

それができないなら言わないでください。聞いていてイラッとくるので。まあ、それを信じるかはどうかはあなた方次第ですけどね。

紛らわしい？しょうがないでしょ。それが私のキャラと言うものですから。

で、本題に戻るわけですが、本当にどうしましょうか。

前回ああは言ったもののやることがまだ決まっていないんです。

具体的に言うといったいどこの世界に行くのか決めていないんですよ。

まったく、この作者は計画性と言ったものが本当にありせんね。この小説を書く前にも何作かあげていたそうですが、そのどれもが途中で行き詰って中途半端に終わらせているんですよね。

その度に、『次こそは頑張ります』って言ってんですよ。もう本当に笑っちゃいますよ。実際この小説もそんな感じで始めたらしいですけど正直不安しかありませんよ。

あ、でもそれはそれでわたしやなじみさん達が自由になりますからいいかもしれませんね。

っと、また話がそれてしまいましたね。すみませんね、どうやらこの作者は話をそらすことが得意らしいですね。それはそれで困りますが。

おっと、また話がそれてしまうところでした。やれやれ、気を付けないといけませんね。まあ、最終的に作者が決めてしまいますからあまり意味はありませんが。

で、もう一回本題に戻るわけですがこれから先どうすればいいのでしょうか。

ねえ、作者さん。私はこれからいったいどうすればいいんですか。
え？『私に聞かないでくれ』ですって？

・・・・・・・・・・・・・・存在ごと消し去ってやろうかヒューマン。自分が設定を好き勝手変えられるからって調子に乗ってんじゃねーぞ。

おっと、つい乱暴な口調になってしまいました。なじみさんの影響ですかね。次に会ったときは訴えましょうかね。

『それはないぜ君』

おや？なじみさんの声が聞こえてきました。おかしいですね、ここにはいないはずなのに。私も幻聴が聞こえてくるようになってしまいましたか。おお、やばいやばい。

っと、そんなことを言っている場合じゃありません。まずはこの先何をするかを決めませんと。

ああ、そう言えば今私がどこにいるか教えていませんでしたね。これは失礼しました。

私は今神の間と呼ばれている場所にいます。どう言った場所かと言いますと、その名が示す通り神がいる場所です。それも大勢の神がいます。その神達が何をしているかと言えば下の世界、すなわち地球が存在しているまたはしていた世界を管理しています。具体的に何を管理しているか説明すると長くなってしまいますので、簡単に言えば魂の管理をしていると言えばいいでしょう。

では、なぜそのような場所に私がいるのかと言いますと、ここなら何かと都合がいいと思ったからです。

先ほども言いましたが、この場所はいくつかの世界を管理しています。つまり、その世界の情報が嫌と言うほどあるのです。情報と言うのはいつになっても大切なものです。時に偽情報と言うのもありますが、それでもあるのとないのでは状況も驚くほど変わるものなんですよ。

このことから私はこの場所に来たと言う訳です。でも、本音を言ってしまいますと別に来る理由はなかったんですよね。そんなことをしなくても私はわかることができますから。

では、なぜこのような場所に来てしまったのかと言いますと、ぶっちゃけなんとなく来てみたかっただけなんです。

さっき言った理由はあくまで建前だったんです。それならはっきりとそう言えばいいじゃないかと思いますよね？でも、いきなりそん

なことを言ったとしてもあなたはすぐに理解できますか？中には詳しく知りたがる人もいるかもしれません。なので、多少面倒でも建前から説明したわけなんです。

さて、話も長くなってしまいました。さぞ読者の皆さんも飽き飽きしているでしょう。そんな皆さんのために今回の話を早く進めることにします。いえいえ、これはあくまで私の勝手な善意でやることですから気にする必要はありませんよ。まあ、人によっては不快感を覚えるかと思いますがご了承ください。

「と、言う訳でどこか面白いところありませんか？」

そう言って、私はちょうど近くにいた神に聞きました。

「え？いや、いきなりそんなことを聞かれましても。と言うか、あなた誰なんですか？見たところ人間と言う感じもしませんし」

「その質問に答えても構いませんが今はそんな悠長にしている気もありません。なので、あなたは私の質問に答えるだけで結構です」

「・・・・・・・・・ちょっと待ってください。他の神達にも連絡を取りますので。私もそこまで詳しく知ってはいないので」

「そうですか。それでは仕方がありませんね」

そう言って、しばらく待つことになりました。ま、いいですか。こういうことに付き合うのも面白いですしね。

そうして、思っていたら案の定と言いますかお偉いさん方の神達が私を囲むように現れました。その中でリーダー格と思われる神が私にこう言いました。

「貴様か。我々神の領域に無断で侵入し、挙句の果てに命令したと言うのは」

「・・・・・・・・・・ええそうですが、それが何か？」

「何か、だと？これはおかしいことを言うな貴様。人間ではないのはすでに聞いてはいるがいくらなんでも傲慢が過ぎるぞ。それともなんだ？神に勝てるとでも言うのか貴様」

リーダー格の神がそう言うと周りの神達が一斉に笑い出し、さまざまなことを言い出しました。

「おいおい、それはないだろう」「ありえるわけがない」「もし、そうだとしたら見せてもらいたいものだ」「人間じゃないからって

勝った気になるなんて本当に阿呆としか言いようがない」「おい、そんなことを言うなよ、それじゃあ人間と変わらないじゃないか」「いや、もしかしたら人間と同じかもしれないぞ」「ハハハ、そうかもな」

「・・・・・・・・・と、言う訳だ。はっきり言うが我らは貴様に命令される道理はない。そして、貴様を見逃す気もしない。これがどういう意味かわかるよな？」

「・・・・・そうですね、その問いに対する答えとしては、わかるともわからないとも言える、とお答えします。ですが、その前にあなた方は１つ間違いを犯しています」

「・・・・・・・・・・何だと？我らが何を間違えたと言うのだ」

「わかりませんか？あなた方は私の頼みを命令と履き違えていると言うことですよ。私はあくまで『面白いところはないか』と尋ねただけなんですから」

「そうか。それは悪かったな。だが、例えそうだとしても聞いてやることはできないな」

「なぜですか？できれば理由を教えてください」

私がそう言うと、今度はバカにした笑い声がリーダー格の神も含めて聞こえてきました。そして、その中の一人がこう言いました。

「わからないか？だとしたら、教えて・・・・・・・・やるわけないだろうこの無能で愚かで阿呆な下の世界の者が！！」

そう言うのと同時に神達は私に襲い掛かりました。この状態を一言で言ってしまえばリンチです。当然、私はその言葉通りに現在進行形でやられています。

ある者は殴り、ある者は剣で刺し、ある者は槍で突き、ある者は魔法や弾幕などの方法で攻撃したり、またある者は私の存在を消したりするなどといったことでした。

そして、その度に私は何事もなかったか状態になりました。それを何回も見ていたからでしょうか。次第に向こうは勢いがなくなっていき、恐怖の感情が感じるようになりました。それを代表するかのようにリーダー格の神がこう言いました。

「お、お前はいったい何者なんだ！？なんでこんなにやっているのになんともないんだ！？」

「その質問に対しての答えはもうすでに言っていますよ。最初に言

ったでしょう？あなた方はただ私の質問に答えるだけで結構ですって。わかったならやるべきことをやって下さい。正直こっちも待つのはそこまで好きじゃないんですから」

「わ、わかった。わかったから、怒らないでくれ。頼む」

「別に怒ってはいませんよ。それと、怒らせたくないと本気で思っているなら早くすべきだと思いますよ」

「あ、ああそうだな。おい、お前らなんか面白いところはないのか」

「いや、そう言われましても・・・・・・・あ！あれなんかどうですか？ほら、この前５０人の死んだ人間達にいろんな特典を付けて転生した世界とかはどうですかね」

「あの世界か？だが、あれは我らの数少ない娯楽の１つだしなぁ」

「別にあなた方の都合なんてどうでもいいので教えてくれませんかねその世界について」

「あ、ああ。その世界はあるアニメの世界の平行世界の１つだ。で、先ほどそこの者が言った通り我らが死んだ人間達を特典付きで転生させたのだ。そして、いったい誰が生き残ることができるのか賭け

をしている真っ最中ってわけだ。っと、話がそれてしまったな。で、その世界が何のアニメの世界なのかについてだが」

「ああ、別に言わなくてもいいですよ。もうとっくにわかっていますし」

「そ、そうなのか？だとしたらなぜわざわざ我らに言わせたんだ？」

「何故って、だって何も聞かないで話を進ませると読者の皆さんがわからないかもしれないじゃないですか。わかりましたか？さて、そんな訳で余計なことをあなた方にさせてしまいましたので謝罪の気持ちとしてあなた方にお礼としてあるものをあげるとします」

「？あるもの？」

「はい。と、言う訳でありがたく受け取ってくださいゴット共♪」

そう言うのと同時に、グチャ、と言う音がしました。そして、そこから真っ赤な水が大量に噴出しました。それを見たゴット達は恐怖の感情に煽られて逃げ出したり、あるいは縮こまって震えたりしました。

「そんなに嫌がらなくても大丈夫ですよ。ちゃんと皆さんには必ず

受け取って貰いますから」

そう言って、私はゴット達に死を残さず送りました。そして、2分かかってしまいましたが送り届けることができました。

え？なんかキャラ変わっていないかって？しょうがないでしょ、そうなるように作者が書いているんですから。

まあ、そんなことはこの際どうでもいいことにします。

「さてと、それでは行くとしますか、その世界に」

あ、ちなみにあの神達を殺した理由ですがなんとなくむかついたからですよ。あの高圧的な態度がなんか癪に障ったんですよね。しかも、あれだけ高圧的だったからちょっとやそっとではやられないかなと期待していたんですが、見事にその期待を裏切られましたよ。

あれじゃあ、なじみさんには及ばないですね。あれ？考えてみたら及ぶとも及ばないとも言えるんじゃないんですかね。まあ、いいですか。

さて、次回ですがまあ間違いなく異世界に行きますね。そこで何をするかはまだ決めていませんのであなた方が決めてもらっても結構

ですよ。まあ、それを作者が採用するかどうかはわかりませんが。

最近の転生者ってこんな感じなのでしょうか？

はい、皆さんこんにちは。この小説の主人公です。

え？私の名前がなんなのかわからない？当たり前ですよ、言ってもいませんし。

それに、例え言ったとしてもそれは今こうしてここにいる私を指す名前でしかありません。それでもいいと言うのなら今回は特別ってわけでもありませんが言いましょう。

私の名前は全存（せぞ）　有無（ゆうむ）と言います。なんか厨二病っぽいと思ったあなたは間違いなく気のせいではありません。でも、私はあまり気にしません。何故かって？だって、なじみさんがいる世界もだいだいそんな感じの名前の人が多いじゃありませんか。だから、今更一人や二人増えたところで何の問題もないと私は思います。うん、それでＯＫだな。

さて、ちょっと遅れ気味になった自己紹介を終わりにして本題に入ろうかと思います。と言うか、入ります。

前回の話を読んでいた方ならだいだいわかっているかと思いますが、今私はあるアニメの世界にいます。正確にはその平行世界です。

で、私がここに来て何をするかと言えば・・・・・・・・・・何でしょうかね？

あ、今ズッコケませんでしたか？でも、いつでもってわけではありませんが私は真剣です。ええ、本当に何をするのか決まっていないのです。そもそも、こうなったのは全て作者の所為なんです。ですから、私は悪くはないはずです。

『いくらなんでも酷くないか？』

はっはっは、これは面白いことを言いますね作者さん。なんならあなたの恥ずかしい過去や実際の名前を言っても構いませんよ？

『お願いですからやめてください』

はいはい、わかりましたよ。今回の私は寛大深いですからそれぐらいのことは許しますよ。まあ、次はどうなるかはわかりませんが。

って、また本題からそれてしまいましたよ。どうしてくれるんですか。知らない？そんな言い訳が通じるとでも。

まあ、そんなことは今はどうでもいいとして早速ですが行動を開始

したいと思います。基本的には中立ポジションをとって行きたいなと思っています。言ってしまえばなじみさんポジションです。なので、パクリだろーと思う方もいるかと思いますがこの際無視することにします。

『ええー。前回に続きそれはないぜ君』

おや？また幻聴が聞こえてきました。私も歳なんでしょうか。と言っても、私に年齢と言った存在はないんですけどね。別になくても存在することはできますしね。

あ、1つ言い忘れてたことがありました。私が今回やってきたこのアニメの世界なんですが名前は『リリカルなのは』と言うらしいんです。聞いた限りだといかにも魔法少女っぽいですね。でも、正直そういうものって私あまり好きじゃないんですよね。嫌いでもありませんけど。

そんなことを考えていたらいくつかの殺気を感じました。アニメ兼原作の時間軸で言うと、確かユーノと言うフェレットでもあり人間でもある存在でしたっけ？がちょうど襲われている時ですかね。で、その後にこの物語の主人公であるなのはと遭遇して最終的に魔法少女になるんでしたよね。

でも、それならちょっとおかしいですね。だって、殺気とともに感じることができる力量が明らかにそこらの雑魚キャラよりも超えて

いますし、何より、その襲っていると思われる者の数がさきほども言いました通り複数認識できます。

原作にはない展開。そして、あまりにも大きすぎる力。これらから考えられることはいくつかありますが、転生者という可能性は十分にあるでしょう。

では、どうするか？今の私には大きく分けて３つの選択肢がありまず。１つ目はユーノを助けて、原作通りに進ませる。それも悪くはありませんね。しかし、それだとある程度まで協力する羽目になってしまうので面倒になってしまうというデメリットもあります。

２つ目はあえて転生者に協力する。それはそれで面白そうですが、何だか勝手に自爆してしまいそうな感じがします。

３つ目は最初の通り中立を保つ。これなら大抵のことなら自由にやることができますのでいいかもしれません。ただ、いかにして敵対関係にさせないかが問題になりますね。

うーむ、どうしましょうかねぇ。個人的には3つ目がいいんですが、面白さ的に言うと１つ目か２つ目の方がいいですよね。でも、それだと面倒事も増えますし。

うーん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・別

に原作を守る必要はありませんよね？と言うか、原作なんてそれがそうだと認識してしまえばいくらでもできますから別に構いませんよね。

となると、あんなこともできると言う訳ですね。あ、やばいこれ面白そうかも。

そう考えていると、自然に笑みがこぼれます。別に構いませんよね？本来あった原作の面影をなくしてしまっても。

そして、私は現場に向かいました。あ、現場と言うのはさきほど言ったユーノが襲われている場所ですよ？え、知っている？それはすみませんね、作者がどうしてもって言うので仕方がなく言ってしまったんで。

まあ、そんなことは置いといて、現場に到着しました。早い？だって、一瞬で移動したんですから。

さて、現状を確認しましょうかね。

ぼろぼろのユーノを転生者かと思われる5人が襲っている。はい、終わり。短すぎる？長く言うより簡潔に言ったほうがなんとなくわかると言うものでしょ。

で、今まさにユーノの命が果てようしているんですが別にいいですね。後で、生き返らせることもできますし。

しかし、誰も私に気付いてくれません。悲しいです。そりゃいきなり5人の背後の出現しましたから仕方がないですけどユーノも気づかないってどうなんですか。私は影が薄いと言うんですか。

腹が立ったので近くにいた1人の首から上を消し飛ばしました。他の人達が気づいたようですがそんなことはどうでもいい。同じように他の4人の首から上を消し飛ばしました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、しまった。これではいかにも暗殺者みたいじゃないですか。このままだと私は暗殺者もしくはアサシンなんて呼ばれてしまう・・・・！早くこいつらを復活させないと。

『アサシン（笑）』

また幻聴が聞こえた気がしましたが今はかまっている暇はありません。とりあえずすぐに活動できる状態に復活させます。

と、言っているうちに終わってましたけどね。正確には『復活させないと』と思った次の瞬間に終わりました。

「・・・・・・・・おい、今何が起きた？」

「え、いや俺もわからないんだが。と言うか、お前さっき首から上がなくなっていなかったか？」

「それを言うならお前もだろ？」

「いやお前もそうだろう？」

「ていうか、さっき俺ら死んでいなかったか？確かに不死に力を俺らは持っているから復活したかもしれないが、いくらなんでも早すぎね？」

「そうですか？と言うか、不死だったんですねあなたたち。普通に殺せましたけど」

「「「「「！？」」」」」

「お、お前、誰だ！？いつからそこに、いや、お前なのかさっきやったのは」

「ええ、まあその通りですが、それが何か？」

「何か？じゃねーよ！！何が目的であんなことをすんだお前！後、少しでユーノを亡き者にできたのによお！！」

ああ、ちなみに彼が言っている通りユーノには病院に戻しておきました。その際にちょっと記憶を消しましたが。もちろん主人公であるなのはも記憶を消して、自宅に帰るようにさせました。

「こうなったらお前を代わりに殺すことにするか」

「いやいやいや、なんでそうなるんですか？いくらなんでも沸点が低いですよ。そんなにあのユーノを殺せなかったのが気に食わなかったんですか？」

「気に食わねえも何ももしあそこで殺せたら、俺らがハーレムエンドを迎えられるはずだったんだよ！それをお前は邪魔しやがって。見たところ俺らと同じ転生者らしいが生きていられると思っていないだろうなぁ」

あ、そう言えばもう一つ言ってないことがありました。今私の前で怒りを露わにしている5人ですが、正確には5人の子供です。それもどれもが銀髪か金髪のオッドアイ。

これはこれで随分とすごいメンツですね。恐らく、ヒロインの誰かを簡単におとせるようそんな風にしたんだと思いますが、はっきり言ってそんなの軽い誘惑にしかなりませんね。この人達の知能を疑いますよ、本当に」

「・・・・・・・・・・・・言ったなてめぇ。もういい、ぶち殺す！！」

そう言って、襲い掛かってくる5人。傍から見ると子供が大人を襲っているように見えます。

「・・・・・・・・・・・はぁ、なんでこうも最近会っている者達は同じ行動を取るんでしょうか」

呆れながらも、私は5人が襲い掛かってくる前に道路に叩き付けました。その衝撃で
道路が激しく損傷しましたが、別に構いません。後で、直しますし。

「な、何が起きたんだ？何で俺ら道路に叩き付けられているんだ？」

「おや？もう傷が治っているのですか。どうやら不死というのも嘘ではなかったようですね」

私がそう言うと、その人は笑みを浮かべこう言いながら立ち上がりました。

「へっ、わかったか。わかったならおとなしく」

「殺せばいいんですね。わかります」

そう言って、立ち上がっている最中に体を縦で2つに分けました。そこから大量に血が飛び散りましたが関係ありません。そして、そいつはそのまま生き返ることはありませんでした。

「な、なんで死んでいるんだよ！？俺達は不死の力を持っているんだぞ！？」

「おやおや、あなた方は随分とおかしいことを言いますね。不死と言うのも所詮その状態を表す名称にしかすぎません。つまり、あなた方がその状態じゃなかっただけ、と言うことだったわけです」

「く、くそ。ならこいつならどうだ！」

そう言った瞬間に胸に槍が刺さっていました。恐らく、必殺系の槍

なのでしょうか。でも、まあ

「こんなの大したことなんですけどね。とりあえず、お礼として私もあげますね」

そう言って、私は彼にこれでもかと言うほどの槍を刺してやりました。悲鳴を上げる前に死んでしまいましたが別にいいですね。

それを見て、他の3人も恐怖を露わにし、逃げ出そうとしますが体が動かず、まだ道路と肌を合わせている状態です。まあ、私がそのようにさせているんですけど。

「と、言う訳で残った3人も逝ってください♪」

ブチッと音とともに彼らの体は初めは四肢から、その後は頭、そして最後には肉が肉眼で見えなくなってしまうほど引きちぎられました。

跡には、大量の血と損傷を起こした道路が残りましたので何事もなかったかのようにそれらを消し去りました。

しかし、今回は彼らはラッキーかも知れません。何故なら、今回の私は寛大だからです。なので、跡を消し去った後、彼らをもう一度

復活させました。もちろん死ぬ前の状態に戻しました。

ただ、彼らは復活した後、やけに私のことを恐れていたんですがね。まあ、こればかりは事項自得ですけどね。いっそのこと記憶や心を改ざんさせようかと思いましたが、それだとあまり面白くないのでやりませんでした。

そして、私はまだおびえ続けている彼らを背に歩き始めました。

え？どこに向かうんだって？どこでもいいでしょ。なんならあなた方が考えますか？今なら、作者に何を言ってもいいかと思いますよ。もしかしたら、その通りになるかもしれませんし。

それでは、また次回にお会いしましょう。

予想外とはこのことを言うんですね

はい、皆さんこんにちは、もしくはこんばんは全存有無です。え？読みも一緒に書いて欲しい？そうしたいのはやまやまではありませんので諦めてください。どうしてもと言う方は2話目を参照にしてください。ちなみにこれは3話目です。

で、早速ですが前回までのあらすじといきましょう。

前回リリカルなのはの世界に来た私こと全存有無は思考内討論をした結果、原作じゃない展開にするべく行動を開始。その手始めにユーノの傷を治し、記憶を少しいじって何事もなかったかのようにしました。その際に転生者と思われる5人に襲撃されましたが、逆にコテンパンにしてあげました。

以上、前回までのあらすじでした～。

・・・・・・・・・・・・・・・・事実と少し違う？ハハハ、何を言っているんですか。まさに事実通りじゃないですか。ただ、少し簡潔にまとめてしまいましたので行数が3行になってしまいましたが別に構いませんよね。

さて、そんなわけで今回も行動しようかなと思っています。ちなみに時間軸で言うと、前回ユーノが襲われてから2日が経っています。

昨日は何もせずに様子見をしていました。そしたら、案の定と言うべきでしょうか原作からかなり外れ始めています。まず何と言っても主人公のなのはが魔法少女になっていません。これだけでもう物語は大きく変わっています。そして、ユーノも傷が完治しているため昨日からすでにジュエルシードを自力で集め始めています。これでなのはが魔法少女になる理由は1つ消えました。

なぜ1つかと言いますと、まだいるであろう転生者がなんらかの方法でなのはを魔法少女にさせるかもしれないからです。それだけではありません。例えそれがなかったとしても別の経緯でなるかもしれません。

やっぱりなんと言ってもあの魔法に必要な要素が多いと言うのが最大の要因なんでしょう。実際にそういった人ほど最終的になってしまうと言うのがほとんどですしね。稀にそうじゃないこともありますがそれでも関わりを持つ、あるいは持ったことが1つは必ずあるようになりますからね。

と言う訳で今回はなのはの魔法の才能を根こそぎ奪ってやることにします。あ、勘違いしないように言っておきますが、あくまでこれは言葉の比喩なので実際に乱暴なことを一切しません。と言うか、もししてしまったらなじみさんあたりにトラウマものを植え付けられつ口実を作られてしまいます。そんなのは勘弁願いたいです。いくら私でも何もなかったではすみませんから。

とか考えているうちに実はもう着いていたりします。どこ？って言えば知っている人は知っているなのはの家でもある翠屋です。

ただ、はっきり言ってしまうと実はもう終わっていたりするんですよね。何が？と言いますと先ほど言いました魔法の才能を奪うことですよ。

え？いつしたの？と言うか、そんなことできるの？と思う人もいるかと思います。実はまだ言ってはいませんでしたが私は世界の設定を変えることをたやすく行うことができるなんて芸道ができるんですよ。

なんだそのチート能力ｗｗｗｗｗｗｗｗなら前回のあれは何だったんだｗｗｗｗｗｗｗとか思う人は作者に言ってください。だいだいと言っていいほどの原因は作者にありますので。

ただ、まあ理由としましてはその方が実感があって面白く感じることができるなぁって言った感じです。

だって、皆さんだっていつも行われる戦闘があっさり終わってしまうとかだったら面白くありませんよね？そんなことがないように私はしているのです。と言うより、しないとこの小説は何がしたいのかわからなくなってしまいます。いや、もうこんなことを言っている時点で終わっているかもしれません。

はっ！と言うことはもうこの小説は終わったのか。よかった、前回心配していたけどそんなことをこれから気にする必要はなくなって。

と言う訳でこの小説は今回を持って終わりになります。今までご愛読ありがとうございました。

終わり。

「おいおい、せっかく来てみたらもう終わりだなんていくらなんでも酷すぎじゃないか」

そんな声が後ろから聞こえてきました。そして、振り返ってみたらそこにいたのは本来ならいないはずの人がいました。これが示す答えは１つ！

「ぎゃーおばけだー。ごめんなさいもうしませんからあの世に帰って下さい。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「君はいつから仏教徒になったんだい。それと死んでもいないし僕はどこにでも現れるのは君がよく知っているだろう」

「知っていますよそんなこと。ただなんとなく言ってだけです」

「うん、これは言うまでもなく死刑だね」

「酷い！？何気に酷過ぎますよなじみさん！」

「と言うのは冗談さ。いくら僕でも大した理由もなしに死刑判決をするわけじゃないよ」

「と言うことは理由があればしていたんですね。おお、怖い怖い」

「いまから死刑になりたい？」

「ごめんなさい。もうしませんと思いますから許してください」

「だが断る」

「なじみさんの顔は1度までだった！！って、言っているそばからギャ――――――！！！！！」

～3分後～

「ちょうどカップラーメンができる時間ですね。そう言えばム〇カ大佐も3分間待ってやるっていってましたね。もしかしてあの人カップ麺でも食べたかったのでしょうか」

「もしそうだったらある意味すごいよ。と言うか、それ以前にあの世界にカップ麺はないよ、当たり前だけど」

「本当ですか？でも、もしかしたらあったかもしれませんよ。平行世界に」

「そんなことを言ったらすべての事柄が当てはまってしまうじゃないか。それをわかってて言っているのかい君？」

「もちのろんに決まっているじゃないですか！！」

「死刑」

「理不尽すぎる！？」

「と言うのは冗談さ。いくらなんでもこんな街中でやるほど僕は馬鹿じゃないさ」

「とか言っていますけど、さっき思いっきりやっていませんでしたか。見ていた人は全員記憶が抜かれているのでわかってはいませんが少なくとも私１０回以上殺されているんですけど」

「正確には４９２５兆９１６５億２６１１万０６４３回だよ」

「１０回どころか千すら軽く超えてたー！？しかも、たぶんだけど過負荷（マイナス）のスキルの数だこれー！！」

「よくわかったね。でも、惜しいね。正確には今僕が持っている過負荷（マイナス）のスキルの数だよ」

「どっちにしろあっているじゃないですか」

「いやいや、前回君と会ったときは４９２５兆９１６５億２６１１万０６４４個だったんだから違うよ」

「え？また誰かにあげたんですか？」

「そ。今回は球磨川君と言う子にね」

「へぇ、そうなんですか」

「おや？あまり興味がなさそうだね」

「別に持ったとしても私が変わると言う訳でもありませんしね」

「ま、確かにそうだね。ところで、ずるずるとこんな会話が続いているけど話を進めなくていいのかい？」

「おっと、そうでしたね。でも、戻る前になじみさんに言っておきたいことが１つあります」

「何だい？言いたいことがあれば何でも言ってごらん」

「そうですか、それでは言いますね。

私を馬鹿にしているのかお前」

「いくらなんでもあれが嘘だってことぐらい私でもわかるわ。お前が貸したスキルは『手のひら孵し(ハンドレット・ガントレッド)』だってのもわかっている。そしてそれは過負荷(マイナス)ではないはずだ。なぜならあれは因果を逆流するスキルでとてもじゃないが過負荷(マイナス)とは言えるものじゃないからだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりばれちゃったか。まったくそういったところは相変わらずだね。まあ、それが君と言う存在なんだけどね。それと、その馬鹿にしていると言う言葉そのままにして返すよ。はっきり言ってそのキャラ似合わないから」

「・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりわかっちゃいますか。はぁ、やっぱ怒りの感情がうまく出せないのかな私」

「いやいや、そんなことはないぜ。むしろよくできていたよ。そしてとてもキモかったよ」

「さりげなくひどいこと言いますねなじみさん！！私が何気に気にしていたことを言うなんてひどいじゃないですか！！」

「それならそれでいいじゃないか。気にしていたんなら言われるべきだろう。それに事実を言ったまでだよ僕は」

「反論したら当たり前だと言うべき正論が帰ってきた！！・・・・・・もう泣いていいですか？」

「それならこの小説を終わらせてからにしてね」

「さっきより言葉がひどくなってるーー！！それってこの小説を終わらせるまで泣けないってことじゃないですか！？」

「後、少なくとも１００話は続けさせること。もし１００話までいかなかったら一生僕の奴隷として存在すること」

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！今回の話で終わらせればいいんじゃね？と思った傍から釘刺されたぁぁぁぁぁぁ！！！！しかも、いかなかった時の条件が酷過ぎる――――――――！！」

「と言う訳でこの小説はここで終わるよ。今まで読んでもらってありがとね。それじゃまたどこかで会おうね。その時は『フラスコ計画』に参加してもらえるとうれしいな。ま、ただの人間には興味はねえけどな」

終わり

「終わらせてたまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「・・・・・・・・・・ちっ。あともう少しだったのに（ボソッ」

「怖ぇ！なじみさん何気に怖いよ！！いったいいつからそうなったの！？」

「初めっから」

「嘘だ！！」

「レナかい君は？」

「せめて伏線ぐらいはしようよ！？」

「はいはい、わかったからその僕っこみたいな口調はやめてね。正直キモイから。後、いつになったら話を進める気だい。読者の皆はもうこれでもかと言うほどイライラしているよ。」

「・・・・・・そう言われると返す言葉もないです。え～読者の皆さん本当に申し訳ありません。と言う訳でまずは現状確認に移ろうかと思います。と言っても、もうすでにわかっている方がいるかと思いますが現在私の前に安心院なじみさんがいます。そして、時が止まっています。原因はなじみさんです。さっき記憶がどうたらこうたらと言ったかと思いますが別にそんなことはありませんでした。場所はさきほどの場所と変わっていません。以上、現状確認を終了します」

「いつから君は語り口になったんだい。はっきり言って傍から見ると1人でぶつぶつ言っている変な人に見えるよ」

「・・・・・・はは、そう言われても反論できませんね。でも、これぐらいでは挫けませんよ。伊達に私なんですから。それと、話は変わってしまいますが恐らく読者の皆さんも思っていることを聞いてもいいですか？」

「別に構わないよ。どうせ『なんで僕がここにいるのか？』ってとこだろ。ま、言ってしまえば今向こうでやることが特になくてさ、暇だからこっちに来てみたんだよ」

「・・・・・人が言うことを先に言うなんてひどいとは思いませんかなじみさん？」

「思うかもね。で、話は聞いたんだけど君この世界に来る前に神を殺したんだって？」

「ええ、そうですがそれが何か？まさかやってはいけなかったとか言うんじゃないですよね。まあ、それでも別に構いませんけどね」

「いや、別にそんなことはないよ。ただ、君が本来なら死の概念がないはずの神を殺したって言うんだからどんな理由があったのかなと気になったからさ。それでどうしてそんなことをしたんだい？」

「う～ん、そうですねぇ。一言で言ってしまえばイラッと来たからでしょうか。相手の実力も量れないのに自分がすべてを握っているっていう感じが好かなかったんですよね。あ、ちなみに1つ言っておきますがあくまでそういうのが嫌いな私だったからそうしただけですから」

「そんなの言われなくてもわかっているよ。それとも、僕を馬鹿にでもしているのかい？・・・・・・・・ふ～ん、やっぱそんなところだったんだね。何だか期待通り過ぎて少しガッカリかな」

「そう言われても私はどうとでも思いませんし、思いもします。それでまさかとは思いますがそれだけではありませんよね？」

「まあね。これは実際に見ていたからわかっているけど君はこの世界を変えようとしているんだろ？正確にはあるアニメの物語をね。できればその理由も聞いてみたいんだけど」

「理由ですか。これも一言で言ってしまえばその方が面白うそうだと思ったからですよ。第一原作なんてそう思って大多数の存在に認めてもらえれば簡単にできてしまいますしね」

「・・・・・・・まったく、君という存在は本当に飽きないね。普通そんなことを正気で言う奴なんて少数しかいないけどそれを実現できる奴なんて僕が知っている限りでは君しかいないよ」

「え？そうなんですか？私が知っている限りでは結構いましたけど」

「ふふ、やっぱり君はそう言うんだね。そして、そのことに対して嘘だとは僕は思わないよ。それが君と言う存在なんだしね。だからこそ、協力してもらいたいと思ってはいるんだけどね」

「フラスコ計画にですか？う～ん、気が向いたらやるかもしれませんね。と言うか、もうすでに協力しているとも言えるはずなんですが」

「いや、僕はあくまで今目の前にいる『君』に頼んでいるんだよ。他の『君』に頼んでいるんじゃない」

「・・・・・本当に飽きませんねなじみさん。どうしてそこまで『私』に拘るんですか？別に他の『私』でもいいんじゃないんですか？」

「それじゃ駄目なんだよ。あくまで『君』本人いや、全存有無と言う存在に協力してもらわないと意味がないんだよ」

「・・・・・そうですか。ですが、お断りしません」

「そうかい・・・・・ってしないのかい」

「ええ。ただ、するとも限りませんよ。もしかしたら協力したくないと思うかもしれませんし。現時点ではとりあえずしたくはないですね」

「結局どっちにしろお断りと言うことだね。まあ、別にいいさ。可能性はゼロじゃないだけでもまだましだしね」

「そうですね。ところで、なじみさん。肝心なことを聞くのを忘れていました」

「何だい？」

「見ていたと言うのなら恐らく全部見ていたかと思いますが、それならどうしてここに来たんですか？まさか、ただおしゃべりトークをするために来たわけじゃありませんよね。あ、そんなことをする人でもありましたねなじみさんは。これは失礼しました」

「否定できないのが痛いところだね。まあ、確かにおしゃべりトークをするために来たわけじゃないさ。さっきも言ったと思うけど僕も今暇でね。それでその暇を潰すと言うことで君に協力と言うより共同戦線を組もうかなと思って」

「いいですよ」

「・・・いくらなんでも早すぎやしないか？少しは考えてみたらどうだい。この僕がそんなことを本気でするとは思わない、とかさ」

「別に思ったところでどうとでもなるわけじゃありませんし、それに」

「それに？」

「例えなじみさんでも今回のことを邪魔してら容赦なく消しますからね」

「・・・・・・そんなことが言うのも実現できるのも知っている限りでは君だけだよ」

「私が知る限りでは結構いますけど？」

「ふふ、そうだね。ま、と言う訳でよろしく頼むよ全存君」

「ええ、こちらこそよろしくなじみさん」

そう言って、互いに握手をしました。

何だか後半が会話ばっかりになってしまったね。この際だから言ってしまいますけど、なじみさんと話をしようとすると大抵このような形になってしまいます。なので、これから先もこんなことが起きるかもしれませんのでご了承してください。

・・・・・・・・・・あれ？今回のお話はこれでいいのでしょうか

？何だかこの世界とは関係ない話になっていた気がするんですけど。
まあ、別にいいですか。

さて、そんなわけで次回のお話は『謎の魔法少女現る！！そしてなじみさんがボケた』ということでいきたいと思います。ちなみに、このお話になる確率は今のところ１０％です。

なので、期待しないで待っててくださいね～。できれば期待してもらっても構いませんよ？もしかしたら当たるかもしれませんので。

それでは次回にまたお会いしましょう。いつになるかはわかりませんけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1199ba/

ちょっと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

2012年1月6日11時45分発行